

「心の架け橋となる税」

伊勢原市立成瀬中学校 1年 伊藤 理緒

先日、私はアルバムの中の一枚の写真に目を止めた。母がやせ細った赤ちゃんを抱いている。シーツの無いベッド、さびたベッド柵、七、八歳くらいの三人の少女が、母の側ではにかんだ笑顔をこちらに向けている。その内の二人は腕にギプスをつけ、骨折しているらしい。また一人の少女は、頭、顔、上半身に火傷らしい大きな傷を負っている。そこは、医療や教育、社会保障が充足していない、中南米の中でも最も貧しいといわれる国。その国の小児総合病院で働いていた頃の母の写真だ。

日本のODA（政府開発援助）の年間予算は、五六一、〇一五、三三二千円。この援助資金は、開発途上国の上下水道等、病院や学校建設等のインフラ整備、かんがい農地への改良、農作物生産の技術指導、専門職種の養成などにあてられている。そして、現地で日本人が直接、援助活動を行っている。

私は学校の社会科の授業で度々、国民の三大義務のひとつは「納税」である事を習っている。物を買うごとに消費税。給料からは所得税。住んでいる県、市へは、市県民税。所有している家や土地へは、固定資産税などが課され、そして徴収された税を原資として、私達への教育費、学校の運営や設備費の負担や、安全な通学路の整備維持。また一定の支給基準はあるが、子ども手当や小児医療費の無償化などを担っている。そして高齢者や障がい者の生活を支える年金支給。万一に生活が困窮した時は、生活保護制度で、最低限度の生活が営める事を保障している。近年では災害復旧や防災対策。現在は、コロナウイルスの感染拡大による、人々の経済活動の急激な落ち込みの緊急対策費として、数々の給付金の支出に当てられている。税の臨機応変な活用に今日の私達の生活は支えられている。

私は、それらの事を思いながら、少し心配な事があった。それは、日本の税が、海外援助に使われて…。という思いだ。「豊かさとは何だろうね。」と母が言った。私は、物質的な豊かさや、教育や医療があたり前に受けられる事だろうかと思った。反面、この写真の少女と私は、生まれた国が違っただけで、この少女は私だったのかもしれないとも思う。

そして後に、日本のODA、国際的な開発援助活動がいかに大切な事であるかが分かった。母の写真の国は、東日本大震災時には一番に支援を申し入れ、弔慰の意を示した。また他のODA対象国も、自国の災害援助チームを被災地へ派遣し困難な援助活動を行った。ODAは、国際社会での日本の地位を支え、そして世界の国の人々との架け橋を築いていたのだと認識した。

私の将来の夢は、助産師だ。日本のみならず貧困や生まれ育った環境で、妊婦や乳幼児が命を落とす事が無い様な助けになりたい。そして、税を納め、また必要な所で、税の活用を担える大人へと成長したいと思う。